

誰にでも虫が好かないというか、嫌な人というのがある。こずえにとっては、いまこちらへ向かってくる、同年輩の婆さんがその人だ。本物らしいフアーをコートの上にかけている。

脇へそれる道はないし、踵をかえして逃げだすには近すぎた。電柱の横でとつさに下を向き、何かを探すふりをしてしまった。

「どうかなさいましたの」

彼女の靴の先が見えたと思ったら、低音の上品な声がふりかかってきた。これが、こずえには苦手なのだ。

「なにか、お探しで……」

「指輪を落としましたのでね」

こずえはスカーフを首に巻きつけるとき、プラスチックの指輪のような輪っかを通して使う。しつかり留まつて着崩れしない。その輪っかを薬指にはめて家をでてしまった。指さきで、もてあそびながら歩いていたので、それがそのまま言葉となつて出たのだ。

あつと思つたが、遅かつた。七十歳をすぎた頃から、フィルターを通さずに言葉が口から滑りでてしまうようになっていた。

「指輪ですつて、まあ、そんな大切なものを」

彼女は片足を浮かせて身をのけぞらせた。

「転びますよ。危ない、危ない」

「指輪でございませよ。高価なものなのでしょうね」

ええ、まあ、と言いながら、こずえはコートのポケットに左手を入れて、薬指の輪っかを親指でこすり落とそうとした。本当は何のおまけだったのかさえ、さっぱり思い出せない。むかしから、引き出しの隅にころがっていただけのものだ。

高価なものでしょうといわれて、負けず性格好をつけてしまい、いまさら素直に白状もできない。もう、とつとと去つて欲しいのやけど、と思う。

「わたくしも、ごいっしょに探してさし上げましょうね」

しつこいなあ、早よ、あっちへ行つて、と心がわあわあ言っているのに、ありがたくて仕方がない顔つきをこしらえてしまった。

結構な婆さんのくせに、体を前かがみにしてバランスも崩さず地面に目を這わせている。

こずえは、ポケットの中で落ちてきた輪っかをにぎりしめた。手のひらに汗をかいている。だんだん彼女にひどいことをしている気がしてきた。謝つて白状しようかと思つても、今さら「プラスチックの輪っかでした。じつはポケットに入れてましたあ」では、あまりにもサマにならない。

ああ、どうしよう。いつまで親切に探してくれるつもりだろう……。

もとは、この人が嫌で逃げ出そうとしたことから始まつた。なんで嫌なのかといえば、何事にもかなわない気がするのだ。

こずえは自分の方が、よっぽど意地悪婆さんのように思えてきた。

「あいう、見つかつたら、差し上げますわ」

こずえの口がまた勝手にうごいて、筋の通らない言葉が滑りでる。一瞬、間があつて、彼女は顔を真っ赤に上気させた。

「そんなつもりで、わたくし……」

体をがくがくと震わせ、腕を突き出してくる。こずえが手で振り払つて身をかわすと、はずみで、彼女がよろけた。

「危ない」。こずえは必死で抱きとめたが、腰をひねつてしまった。イテテとさすつているうちに、彼女は老体を立てなおし、はあはあと喘ぎながら言った。

「はじめっから、指輪なんか、落としていないくせに」

「えっ、じゃあ、なぜ親切に探してくれたの」

むきになつて聞き返すこずえに向かつて、彼女は顔いっぱい笑みを浮かべ、やさしげな声で答えた。

「あなたのねええ、嘘を、見つけてさし上げようと思ひましたのよ」

ああ、やっぱりこの人にはかなわない。